

商機いかせ農家の塾

につぼんの

農業

消費流通編

朝日 12(H24). 8. 18

外食や、総菜・弁当など「中食」の市場が膨らむなか、農家はどうか対応すればいいのか。食品メーカーやスーパーが、そのノウハウを教える学校づくりに乗り出した。

全寮制の私塾

マーケティング、原価計算、生産管理……。カリキュラムは、まるでビジネススクールのようだ。農作物がどう加工され、どう売られるのかを体験学習する講座もある。

名称	実施主体	設立年
ひょうご農業MBA塾	兵庫県	2010年
【特徴】	企業的な農家の育成をめざす。年45コマの講座で、経営計画書の作成、商談会への出品も	
やまがた6次産業ビジネススクール	山形県や民間シンクタンクなど	2009年
【特徴】	加工や販売まで手がける農家の育成をめざす。講座や現場実習など年150コマ	
Agri-MBA 農業ビジネススクール	パソナ農援隊 (人材派遣会社パソナの関連会社)	2007年
【特徴】	農業を始めたい個人や企業向けの農業塾。年30コマの講座を東京で開く	

■全国の主な農業経営塾

私塾「日本農業経営大学校」は来春の開校に向け、9月から生徒20人の募集を始める。2年間の全寮制の

校舎は東京・品川に置く。運営するA般社団法人「アグリフューチャー ジャパン」の設立には、味の素やライフコーポレーションなど200以上の企業・団体が参加する。農業者を、企業のビジネスパートナーとして育てるのが目的だ。4月に計画を公表すると、若手農家や、これから農業を目指すとうとする会社員などから問い合わせが相次いだ。学校設立の中心にいる佛田利弘さん(51)は、農業界では先進的な取り組みで有名だ。石川県野々市市で農業生産法人「ぶった農産」を経営する。日本で初めて農業生産法人を株式会社化し、1980年からは、地元特産「かぶらずし」を自社で製造・販売する。

佛田さんは、国立の農業者大学の卒業生。ただ大学校は、民主党政権の事業仕分けで廃止に。それに代わる農業者のリーダーを育てる場が必要と考えた。賛同者は、すぐにみつかった。JAグループの農林中央金庫の河野良雄理事長もその一人。取引先の食品関連企業に呼びかけ、学校設立に必要な出資金を約200社から集めた。「100%輸入の農産物で賄おう」という食品企業はいない。みんな信頼できる農産物を作ってくれる農家を待望している」と河野理事長。

佛田さんは、講師として教壇に立つつもりだ。「日本の農業は昔ながらの品質過剰。市場の求めに応じた規格の農産物をつくれる人材が必要だ」と意気込む。

経営の楽しさ

経営を重視した農業の学

舎は、山形県や兵庫県など各地でつくられている。2年前に熊本県が始めたAくまもと農業経営塾は、全国の先進農家や食品・流通業の役員を講師に招き、徹底的に経営の議論を交わす。

熊本県山鹿市の平川正剛さん(35)は、その1期生。「塾で、すべてが変わった」と言い切る。

それまで農協への出荷が中心だったが、少しずつ自力で販売先を探し始めた。営業活動でスーツを着るようになり、異業種の経営者から学ぶため、地元の中小企業家同友会に加入した。

食べる人に何を届けたいのかを、いつも考えるようになった。「『経営』の楽しさがわかってきた」。まずは黒皮の小玉スイカを直売して、消費者の反応を探り始めた。(大津智義)